

現代ドイツにおける高等教育の問題

——大衆社会化の中での大学と教養——

沼 尻 正 之

1 はじめに

本稿は、現代ドイツにおける高等教育のかかえる諸問題を、急激に大衆化の進む大学およびギムナジウムの現状を見ることにより明らかにすることを目的としている。具体的には、まず高等教育におけるドイツの制度的特質を論じ、さらにそれを日本も含めた他の諸国との比較を通してより明確にする。同時にそこから、ドイツにおいて大学という場がどのようなかたちでいわゆるエリート形成に関与しているかが明らかになるであろう。またこの問題に関連して、特に90年以降登場してきた、雑誌メディアによる「大学ランキング」の試みについても言及したい。というのも、そこにドイツの大学文化の持つ固有性が端的に現れていると考えられるからである。これに続けて次に、いわゆる「教養」の問題を取り上げたい^①。若年層の教養の衰退というのは、あらゆる国で多かれ少なかれ嘆かれている事態であるが、ギムナジウムやアビトゥアの現状を見ることにより、そのドイツの特性を明らかにすることができる。そして最後に、現在この国の指向している教育改革の矛盾点を、かつての改革の試みを参照しながら指摘してみたい。

本稿で「現代」ドイツという場合に念頭に置かれているのは、主に再統一以後、つまり90年以降のことであるが、こうした「現在」の状況に関する研究は、当然ながら始まったばかりであり、参照しうるまとまった学術的研究はごく限られている。従って本稿では、そうした資料的制約を補完する意味でも、「シュピーゲル」誌をはじめとする各種の総合雑誌などを参照することになるであろう。

^①「教養 Bildung」概念は、通常大きく分けて3つほどの意味で用いられているが（筒井 [1995: 173ff]）、ここでは主にそれを「文化の修得による人格の完成」というドイツに伝統的な意味のものとして捉えている。しかし後にも述べるように、最近になってドイツにおいても、この概念の意味をめぐって議論がなされている。

2 教育制度上の特質

ここではまず、議論の前提となるドイツの教育制度上のいくつかの特徴的な点について確認をしておくことにしたい。その第一に挙げられるのが、いわゆる連邦の各州が持つ「文化高権 Kulturhoheit」である。再統一後のドイツは、ハンブルクやブレーメンなどの特別区も含めると全部で16の州Landから成り立っているが、そのそれぞれが教育制度に関して独自の決定権を持っており、また文部省にあたる組織を持っている。もちろん各州全く異なる制度をとっているわけではなく、それらを統括するものとして各州文相会議や学術審議会Wissenschaftsratといった連邦規模での上位団体が存在している。しかしながら大学入学資格などについての規定は、州ごとにかなり差異を含んだものとなっており、そうした地方分権主義がドイツのひとつの大きな特徴をなしていると言うことができる。（例えば、これは暫定的な状況でもあるのだが、現在小学校入学から大学入学までに必要とされる年数は、州によって12年とするところと13年とするところとが並立している。）こうしたドイツに特徴的な地方分権主義は、もちろんこの国が国民国家として成立してきた際の歴史的事情を背景にしているのであるが、それは後にも述べるように、大学間ヒエラルキーの問題などに大きな影響を与えている。

ドイツの教育制度においてもうひとつ特徴的なのは、いわゆる「三分枝制度 Dreigliedrigsystem」と呼ばれるものである。小学校に入学した生徒たちは、4年間の基礎学習を経た後に次の3つのいずれかの学校に進むことを選択せねばならない。つまり、ギムナジウムGymnasium、実科学校Realschule、基幹学校Hauptschuleのいずれかである。後になって変更することも場合によっては可能であるが、現実にはそこで選択された進路は、そのまま後の学歴を決定することになる。例えば一般の総合大学に進むことができるのは、基本的にはギムナジウムに進学し、その卒業資格であるアビトゥアを取得したものである。したがってこのシステムのもとでは、子供はほぼ10歳頃にその後の人生を決定するような選択に直面することになる。とはいえ想像に難くないように、ほとんどの場合実際にこの選択を行うのは親であり、子供には実質上の選択権はないということになってしまう。こうした問題を緩和するために、60年代頃から更に2年間のオリエンテーション期間をもうけるといった試みや、総合制学校Gesamtschuleというオルターナティブが提唱されるなど、この早すぎる選択時期を先にのぼさうという試みがなされているが、それは必ずしも十分に普及しているとは言えない。

さて、ここでは大学問題を中心的テーマとしているため、上記の三種のうち特にギムナジウムについて更に見ていくことにしたい。現在このギムナジウムをめぐる最大の問題は、

その入学者の急増、またそれに伴うアビトゥア取得者の急増である。大学への進学が唯一可能な機関として、かつてギムナジウムは少数の学歴エリートのためのものであった。いわばそれは、かつては明確に存在していた「教養市民層 Bildungsbürgertum」が自らの身分的地位を再生産するための「学歴資本」を獲得する場であったのである。ドイツにおいては、こうした学歴資本の独占状態は比較的最近まで続いた。1960年になっても、アビトゥアを取得したのは、同年代の青年の中の約6%程度にすぎなかった（旧西ドイツ）。その後ドイツにおいても、他の先進諸国と同様、大学のマス化が進行するが、その度合いは相対的に穏やかなものであった。ドイツにおいて大学生数の増加が急激になり始めるのは、1985年以降のことである。男子の大学生率について言えば、85年に20%前後だったものが90年には30%を越えるにいたっている(Windolf [1994])⁽²⁾。この傾向はその後も続き、95年にはアビトゥア取得者は37.5%を数え、上記の三種の学校の中で最大の割合を占めるものとなった(Der Spiegel, 23/1995)⁽³⁾。

ところで、こうした事態の背景にあるのは、基本的に学費というものが存在しないというドイツの大学制度のひとつの特色であろう。つまりそこでは、教育における機会均等の理念が純粹に実行されているのである。この状況は則ち、経済的には恵まれない家庭の出身であっても、能力さえあれば高学歴を得ることができるという意味で、メリトクラシーが貫徹しているようにも見える。しかしそうした考え方は実際にはいささか単純すぎる。以下では、こうした点と関連する、社会におけるエリート形成の問題、そして大学序列化の問題について更に検討していきたい。

3 エリート形成と大学間ヒエラルキーの問題

今日の社会において、いわゆるエリート層というものが「学歴」をその存在の根拠とし

⁽²⁾なお女子の大学生率についてもほぼ同様の変化が見られる。ヴィンドルフはドイツ、アメリカ、日本における大学生率の変化を比較しているが、それによれば、日本やアメリカで大学のマス化が70年代の半ばごろに一段落しているのと比べると、ドイツのこの傾向は際だった特徴を示している。

⁽³⁾なお実科学校修了者は37%、基幹学校修了者は30%となっている。1960年において、前者は約13%、後者は約54%であった。したがって減少しているのは、日本でいえば中学卒業に当たる基幹学校修了者だけであり、専門的技術者を育成する実科学校及びギムナジウムでは増加が見られるということになっている。ギムナジウム進学者の割合はまた、地域によっても大きな開きがある。ホワイトカラー層の多い地域ではその数は高く、例えばダルムシュタットで60%、ボン、ハイデルベルク、ミュンスターで50%となっているのに対し、バイエルン州では18%と極端に低い値となっている(Der Spiegel, 23/1995)。

ていることは疑い得ないであろう。もちろんより詳しく見れば、表面的に「学歴」と捉えられるものが、その背景として出身階層の相違やそれに伴う「文化資本」といったものを持っていることは言うまでもない。しかしいずれにせよ、ある特定の高等教育機関出身という肩書きが、エリート形成の重大な要素になっていることには変わりはない。例えばイギリスにおいてはオックスブリッジの卒業生であるという肩書きが、またフランスにおいてはENA（国立行政学院）やエコール・ノルマル出身という肩書きが、その社会においてエリートたることの必要条件になっている。こうした社会においては従って、卓越した学歴資本を授与する高等教育機関が存在しているということになる。

しかるにドイツにおいては、それらの国に見られるような、伝統的なエリート大学或いはエリート高等教育機関というものがある原則として存在しない。すべての大学はいわば同列に並んでいるのであり、したがって例えば日本などに典型的に見られるようなピラミッド型の大学間ヒエラルキーは存在しない。これは建前上存在しないというのではなく、実際に存在しないのである。アビトゥアを取得した学生は従って、基本的には自らの希望するいかなる大学でも学ぶことができる。さらに大学間での学籍の移動ということも頻繁に行われる⁽⁴⁾。学生は、行き先の大学で学籍が確保できる限り、大学を自由に変える権利を持っている。多くの場合、基礎過程Grundstudiumを終え、専門課程Hauptstudiumに進むための中間試験Zwischenprüfungに合格した後、それは行われるのであるが、少なからぬ学生がこうした学籍の移動を行うということ自体が、大学間ヒエラルキーの不在を示しているといえるであろう。

また、大学のマス化に伴う動きにおいても、ドイツは他の国々と異なる特徴を示している。ヴィンドルフによれば、60年代半ばから70年代半ばにかけての学生数の増大による急激な大学の大量化の過程の中で、日本やアメリカなどの国はそうした事態を、エリート大学とマス大学とのいわば役割分担によって解決しようとした(Windolf, 1994)。つまり伝統的なエリート大学の存在は、そこに所属することによって社会的地位の保証される学歴を付与する場として、シンボリックに受験競争を加熱する。しかし現実にはそこに到達できるものの数は限られているため、増大した受験生を受け入れる受け皿が必要となる。その役割を担ったのが、大学間ヒエラルキーの下方に位置するマス大学であった。つまり大学

⁽⁴⁾こうした「転学の自由」もドイツの大学制度の特徴であろう。上山安敏によれば、ドイツにおいてはこの転学の自由が則ち学問の自由という意味付けをもっていたが、それは世紀末のワンダーフォーゲルにも影響を与えた中世の遍歴学生をひとつのモデルとしていた（上山[1986: 165]）。ドイツでは大学ではなく学生団体（コール、ブルシェンシャフトなど）が学閥（イギリスにおけるオックスブリッジなど）の社会的機能を果たしていたのであるが、こうした事態の背景にも、この転学の自由という原則があったと言えるのである。

の大衆化の流れの中で、拡大したのはピラミッド型のヒエラルキーの底辺の方であったのである。ヴィンドルフによれば、学生数の増大という事態に対して、教育機関のレベルが高ければ高いほど学生数の増加は制限され、それが低ければ低いほど制限が緩やかになるというテーゼが成立する。希望するレベルの大学に到達できなかった学生も、これでもとなくも大学進学という目標自体は達成できることになり、しかもそれが試験という「客観的な」手段によって決定されたということから、「冷却」機能が作動することになる。というのも、そうした受験競争においては、少なくとも見かけ上メリトクラシーが貫徹しており^⑥、そこにおける不成功は自らの努力不足が原因であると納得せざるを得ないからである。

これに対してドイツでは、先にも述べたように時期的なズレがあるとはいえ同様の大衆化が生じたにも関わらず、その拡大の仕方は異なっていた。つまりそこにはそもそも大学間ヒエラルキーというものが存在しないため、上記のようなプロセスが成立し得ないのである。ドイツにおいて大学のマス化は、基本的にその一様な拡大という過程をたどったのであり（それは今もなお継続中である）、このことは大学或いは学科ごとの学生数の多さが端的に示している。例えば経営学科を例に取るならば、もっとも学生数の多いケルン大学で1989/90の冬学期にそこに所属している学生数は7721人であった(Giese und Bathelt [1994:50])。こうした事実を見る限り、ドイツにおいて大学という場の内部ではメリトクラシーが作用していないということがひとまず言えるであろう。大学間格差に基づく「学歴エリート」というものが存在しない以上、メリトクラシーの徹底度は限定されざるを得ないからである。したがって仮にドイツにおいて「学歴エリート」というものが設定できるとしても、それはある一定のエリート教育機関に所属するものを指すのではなく、むしろ大学生全体をそう名付けねばならないことになるであろう。そしてまた、この大学生になるということがほぼギムナジウムに進学するかどうかということによって決定されているということを考えるならば（つまり本人よりもむしろ親の意志がそこで重要なファクターであろうことを考慮に入れるならば）、ドイツにおいて「学歴エリート」は、各人の出身階層によってより強く規定されていると言えることになるであろう。

しかしこうした記述には、実際には一定の留保が必要である。というのも先に、原則的にはすべての学生が希望の大学に進学することができると書いたが、このことは必ずしも全員が希望の「学科」に進めるということを意味しないからである。ZVS（大学学籍配分

^⑥ただし、そこでメリトクラシーが貫徹しているように見えるのは、あくまで見かけ上のことにすぎない。そうした事態の背後には、実際には社会階層の再生産のプロセスが隠されている。こうした点については、（竹内[1995]）を参照。

センター)という組織がドルトムントにある⁶⁾。ドイツにおいては各大学ではなく、このZVSが一括して学生の学籍を管理している。そしてこのZVSは、どの大学であるかに関わらず学生数を制限すべき学科というものを設定しているのである。Numerus Clausus (略称 N. C.) と呼ばれるこの学科別の入学許可制限は、学生数の増大に対応するために1972年に初めて導入された制度で、主に医学部など少数の学科が対象となっていた。しかしその後特に85年以降の学生数の増大を経て、N. C. 指定を受ける学科は急激に増加していった⁷⁾。ある学科に入学制限が課されるということは、そこに所属することを過剰な数の学生が目指しているということであり、則ち何らかの理由でその学科に人気があるということを示しているが、それは多くの場合単に人気があるというだけではなく、そこを出ることによって得られるメリット、則ち経済的、社会的に見て望ましい職業に就ける蓋然性の高さなどが、あらかじめ考慮されていると言えるであろう。ドイツの大学に特徴的なこのN. C. の存在は、ここでエリート形成の問題とつながりを持ってくるのである⁸⁾。

さて、このN. C. 指定の学科に入ろうとする者は、それ以外の場合と比べてより多くの困難を強いられることになる。許可が出た場合でも一定期間入学を待たなければならないことがしばしばおこり、また学科によっては一種の入学試験を課す場合もある。しかしこれらの学生にとってもっとも重要なことは、アビトゥアで好成績を収めることである。いわばアビトゥアで優秀な成績を収めることが、難易度の高い学科に進学するための必要条件となった。大学のマス化の過程の中で、アビトゥアはただ取得すればよいものから、好成績を収めるべきものへと変化していったのである。このような事実を見たとき明らかになるのは、現代ドイツの大学制度における学科間ヒエラルキーの存在であろう。他の国々のような大学間ヒエラルキーというものの存在しないドイツにおいては、それが果たす差異化の機能を学科間ヒエラルキーが担うという傾向が、ここ10年ほどの学生数の急増の中で強まっていったのである。

⁶⁾ZVS(Zentralstelle für die Vergabe von Studienplätzen)は、1973年に設立された。

⁷⁾N. C. には、厳密に言えば、ZVSの定めるもの(これはしたがって、あらゆる大学に適用されることになる)と、各大学がそれぞれの事情に応じて設定するもの(Uni-nc)の2種類がある。93年の時点で、14学科がZVSによりN. C. の指定を受けている。またハイデルベルク大学を例に取るならば、Uni-ncの指定を受けている学科は94年で12専攻にのぼる。

⁸⁾K・シリーなども言うように、N. C. はエリート選抜と密接に関係している(Focus, 39/1993)。つまり、すぐ後に述べるようにN. C. 指定の学科に入るためにアビトゥアでの好成績が必要とされるとすれば、そこでいわば「優秀な」人材の選抜が行われていることになるからである。

4 諸メディアによる大学ランキングの試み

さて、前章でドイツにおいてはN. C. という制度に基づく学科間ヒエラルキーが大学間ヒエラルキーの代替物になっていると述べたが、ドイツにおいても大学間序列というものが全く意識されていないわけではない。もちろん例えば日本に見られるような、偏差値というものを基準にしたある種の実体的なヒエラルキーはそこには存在しない。しかしドイツにおいても、そうした序列が意識化される程度は急速に高まっている。こうした事態を反映しているのが、主に雑誌メディアによる大学ランキングの試みであろう。そのような試みは、とりわけ90年以降頻繁に見られるようになった。これは85年以降の学生数の急増に対応しているとともに、それを受けた学術審議会が、種々の高等教育機関において学生への教育の質をよくしていくためには、そこにおいてなされている教育の可否を明確にすることが必要であり、そのためには大学をはじめとする高等教育機関の間に競争原理を導入することが必要であるという見解を明らかにしたことに影響を受けている(Giese und Bathelt [1994:37])。とりわけ1990年のシュピーゲル誌(Der Spiegel)による調査は、その後の大学ランキング・ブームの火付け役となったと同時に、その一般の予想を覆す結果が大きな話題を呼んだ⁹⁾。以下では、そうしたもののうちのいくつかを具体的に検討していくことにしたい。

・「シュピーゲル」(1990) (Spiegel Spezial, 1/1990)

調査対象は5~10ゼメスターの大学生6000人、51大学、のべ500学科¹⁰⁾。無作為抽出法で各学科ごとに12人の学生が選ばれ、面接調査により18項目にわたる質問(6段階評価)に対して回答するという形式。質問項目は、約半数が大学の設備や研究環境に関するものであり、残りの半数が教官が行う講義・ゼミナールなどの質に関するものである(表1を参照)。

⁹⁾Der Spiegelのこの調査以後、Management- Wissen(1991)やManager- Magazin(1992)などの経営者雑誌が、またさらにはStem(1993)、Focus(1993)といった一般雑誌が同様の調査を行い、93年にはDer Spiegel が2度目の調査を行っている。これらについては、以下のものを参照。(Giese und Bathelt [1994])

¹⁰⁾対象となった学科の種類は全部で15であったが、必ずしも調査対象となった大学すべてにそれらの学科があるわけではないので、のべ500学科となっている。勿論この他にも様々な学科が存在するが、この15学科で総学生数の70%が占められており、十分な代表性があるとされている。15学科とは以下のものである。機械工学、医学、法学、教育学、化学、物理学、情報学、歴史学、数学、心理学、電子工学、ゲルマニスティック、経済学、政治学・社会科学、生物学。総合ランキング以外に、これらそれぞれの学科ごとにまたランキングが作成されている。

・「シュピーゲル」(1993) (Spiegel Spezial, 3/1993)

調査対象は5~10ゼメスターの大学生11828人(うち旧東ドイツの大学生が1191人、先の調査でサンプル数の少なさを指摘されたため対象数が約倍になっている)、49大学、のべ594学科。各学科ごとに18人が選ばれる。その他質問などについては上とほぼ同様。ただし今回は学生だけでなく、教官(教授、講師など)1185人にも別にアンケートを行っている⁽¹⁾(表2を参照)。

調査方法からも明らかなように、「シュピーゲル」誌の調査は、主に各大学における専門教育の充実度を問うものである。1990年の調査の結果と1993年のそれとの間には様々な差異が見られるが、「シュピーゲル」自身も総括しているように、大枠では結果は一致している(Spiegel Spezial, 3/1993, S.18)。1993年の調査での上位5番目までの大学のうち4つまで(デュッセルドルフ大学、コンスタンツ大学、ジーゲン大学、ビーレフェルト大学)が、1990年の調査において上位10番目までにランクインしていることに、それは表れている。この2度の調査の結果は、大きく言って次の2つの特徴を示している。

- (1) 小中規模の大学の評価が高い。デュッセルドルフ大学の19000人が上限であり、上位の大学はたいていそれより小規模である。
- (2) 新しい大学の評価が高い。93年の調査でベスト10に入った大学すべてが60年代、70年代に新設されたものである。

2度の調査でいずれもランキングのもっとも下に位置しているのは、ボン大学、ミュンスター大学、ハンブルク大学、ベルリン工科大学、ポッフム大学、フランクフルト大学、ミュンヘン大学など、伝統があり学生数の多い大学である。(例えば、93年に最下位にランクされたボン大学は、1786年創立、学生数37000人である。) こうした伝統的大学は、世間一般には「よい大学」と考えられており(それ故学生数も増えるのであるが)、逆に伝統の浅い大学はいわば「新参者」として軽んぜられるような風潮があった。それだけに「シュピーゲル」の調査は、驚きをもってむかえられたのである。1993年に同時に行われた大学教官に対する調査の結果は、この点どちらかといえば伝統的大学に高い評価を与えているという点で、世間一般の評判に近いと言える。この両者の間には、しばしば著しい差異が見られる。いくつか例を挙げてみよう。

⁽¹⁾また、旧東ドイツの大学生に対しても異なったアンケートが行われた。なお対象学科15のうち前回の心理学が英語学・英文学に変更された。さらに、93年版では社会学科に関して独立のランキングがつくられている。これに関しては表4および表5を参照。前者は学生による評価、後者は教官による評価である。

- ・ハイデルベルク大学の数学科に関して、教官の評価では3位だが、学生の評価では47位（最下位）である。
- ・チュービンゲン大学の法学科に関して、教官の評価では2位だが、学生の評価では28位（下から3番目）である。

ここで挙げたのは、どちらかと言えば極端な例であるが、多かれ少なかれ教官の評価（一般的な大学の名声）と学生の評価との間には大きな差がある。例えば93年の総合評価で最下位になったボン大学も、教官の間では必ずしも評価は低くない。これは教官（或いはその研究業績）の質と、そこで行われている教育の質とが一致していない可能性を示唆している。この点に関して興味深いもうひとつのランキング調査、「フォークス」誌によるそれを見てみよう。

・「フォークス」（1993）(Focus, 39/1993)

「フォークス」による調査は、「シュピーゲル」など先行する同様の調査が学生や教官などの主観的見解を聞くだけのものである点を批判し、客観的データによる大学ランキングを試みている。そこで基準になっているのは、各大学に所属する教官の学術雑誌等に掲載された研究業績数である。したがって、ここで問題になっているのは、研究機関としての大学のランキングである（「シュピーゲル」においては、教育機関としての大学が問題となっていた）と言えるであろう（表3を参照）。

結果としては、いわゆる伝統的大学が上位を占めていることが明らかである。ミュンヘン大学、ハンブルク大学、ポッフム大学など、「シュピーゲル」においては下位に位置した大学が上位を占めている。93年の「シュピーゲル」の調査で最下位であったボン大学は、ここでは3位にランクされている。逆にジーゲン大学、デュイスブルク大学など、「シュピーゲル」において上位にランクされた新興の小規模大学は、「フォークス」においてはランキングの下の方にその名前を見ることができる。全体として「フォークス」誌による調査の結果は、大学ランキングについて一般的にもたれている印象を支持するものになっていると言えるであろう。

さて、ここまで3つの大学ランキングを具体的に見てきた。このうち特に「シュピーゲル」の調査に関しては、その方法などに関して批判が成されているが(Giese und Bathelt [1994])⁽¹²⁾、ここで挙げた2種類の雑誌によるランキングの結果は、ドイツの大学制度において、研究機関としての名聲と、教育機関としての有効性とが矛盾するものとなっている

⁽¹²⁾最大の問題点はやはり、評価に主観的な要素が多く含まれざるを得ないというところにあると言えるであろう。また質問項目の中には、研究施設が新しいかどうかを聞くなど、明らかに新設大学に有利になるようなものが含まれている。

事態を示している。こうした相違が生まれるのは、基本的に大学入試というものの存在しないドイツにおいては、ある意味で因果的に必然的な事態である。つまり、まず学生は一般的に評判の高い伝統的大学に進学しようとする傾向が高い。するとそうした大学は学生過剰になり、大学の環境は悪化する。伝統的威信の高い大学ほどマス化しやすいことになるのである。ゼミの人数は増大し、教官との面会時間Sprechstundeを確保することが困難になる。また文献は貸し出し中であることが多くなり、コンピュータなど諸設備は順番待ちをしなければ使うことができない。そうなれば大学の提供する教育全般について、学生の不満は当然ながら高まる。このような流れを考えるならば、上述したような2つの傾向が存在することには疑問はなくなるのである。いずれにせよ皮肉なことに、こうした様々な大学ランキングの試みが示しているのは、結局のところドイツにおいては確固とした大学間の序列が存在しないということに他ならないと言えるであろう。これは大学入試が存在しないということだけではなく、ドイツに特徴的な地方分権主義にも拠っている。日本やフランスのような中央集権的な傾向の強い国家においては、官吏養成機関の性質を持った特定の教育機関の出身であるということがキャリア形成にあたって決定的な要素となるが、ドイツのような（イタリアなどもそうした例に含まれるであろう）地方分権主義的な国家においては、そうした特定教育機関というものが成立しにくく、そのかわりに各種資格や学位などの持つ意味が増大する。実際ドイツは、古くから「資格社会」の性質を強く持つ国家だったのである。

5 エリート形成と「教養」

さて上述のように、ドイツにおいてはいわゆる「学歴エリート」というものは存在しないように見える。つまり、前章でも述べたように、社会的に認知された固定的な大学間ヒエラルキーというものが不在である以上、仮にエリートと呼ばれる社会層が明確に存在するとしても、それは特定の教育機関の出身であるということとは相関性を持っていないのである。かつてのドイツにおいては、高等教育機関で得られた学歴資本を媒介としたエリート知識人層というものが存在した。教養市民層がそれである。教養市民層はほぼ18世紀の終わり頃に成立したが、それ以後19世紀末まで、この階層はドイツの文化資本をほとんど完全に独占していた⁽¹³⁾。こうした時代においては、そもそも高等教育を受ける人間がごく少数であったため、高等教育を受けるということが則ち、学歴エリートへの道を保証して

⁽¹³⁾ こうした点については（リンガー [1991]）を参照。また、近代日本とドイツの学歴エリートの歴史的変遷に関して比較考察したものとして、以下のものを参照。田中 [1990]

いたと言えるが、より細かく見ればその中にも差異化の契機は含まれていた。その第一は、総合大学とその他の高等教育機関との間の差異である。総合大学は、いわば実学とは離れた「教養知」を司るところとして、とりわけ高い威信を誇っていた。そしてこれに加えて、さらにコールやブルシェンシャフトといった学生団体を基準にした差異化の契機が存在していた。特にコールは、エリートを養成する場として、社会的・政治的に重要な意義を持っていたのである⁽¹⁴⁾。こうした学生団体は、ケーゼン・コール⁽¹⁵⁾に代表されるように、大学を越えた横のつながりを持っていた。この点が、他の国とは異なる、当時のドイツの大学文化の特徴であったと言えるであろう。つまり19世紀末ごろには、「ドイツでは大学ではなく、学生団体が学閥の社会的機能を果たすようになっていた」(上山 [1986: 165]) ののである。したがってドイツにおいて、大学差がエリート選抜の役割を果たす割合の相対的に小さいことは、むしろ伝統に属することであると言えるであろう⁽¹⁶⁾。

ところでエリート知識人としての教養市民層は、大衆社会化の進展、及びそれともなう高等教育の拡大などの影響のもと、ワイマール期ごろから衰退に向かう。ドイツにおいては更に、第二次大戦後の民主主義的理念の導入、さらには68年の反体制的学生運動などを経て、そもそもエリートというものについて語ること自体が反動的であり、一種のタブーであるかのような風潮が生まれた。実際現在のドイツにおいては、かつてのような明確なエリートの再生産ルートというものは存在しない。その意味でドイツは、相対的に平等主義的理念の貫徹した国であると捉えることもできるであろう⁽¹⁷⁾。しかしそのドイツにおいても昨今、政財界などからエリート待望論とでも呼べるような議論が頻出するようになってきている⁽¹⁸⁾。そうした流れの中で注目を集めているのが、ごく少数ではあるが存在する私立大学である。ヘッセン州の田舎町エストリッヒ・ヴィンケルにあるEBS(European Business School)などが、その代表的な例であろう⁽¹⁹⁾。そうした私立大学は、マス化した公

⁽¹⁴⁾この点については(上山 [1986])を参照。こうした学生団体は、現在でも存在しており、街中などでしばしばそろいのユニフォームを着たブルシェンシャフトのメンバーを見かけることがある。また、中にはまだ決闘を行う団体も存在している。しかしそれらはもはや一般社会からは遊離しており、アナクロニズム的な印象を与えていることは否めない。

⁽¹⁵⁾1855年に、ケーゼンで「ケーゼン学生組合連絡委員会議連盟」(KSCV)に結集したコールのことを指す。保守的で非政治的な性格を持っていた。ボンのコール・ボルシア、ハイデルベルクのサクソン・ボルシア、ゲッティンゲンのサクソニアなどが特に著名で、ほとんどが貴族・高級官僚・大学教授・大商人などの子弟から成る、一種のエリート・サークルであった。こうした学生団体は、当時高級行政官僚の大きな補給源であった。

⁽¹⁶⁾ただし当時も、学生団体だけでなく、学科を媒介としたエリート形成が行われていた。例えば法科出身が官僚の上層部を多く占めるという事態に対し、法科独占Juristenmonopolという批判がなされていた。

立大学に不満を持つ上流階級の子弟を集め、新しい時代のエリート養成を旗印に掲げている。こうした試みが実際にどの程度の成功を収めるのかは明らかでないが、それが現在の大学制度に対する批判の大きさを反映していることは確かであろう。

同様の傾向はギムナジウムにおいても見られる。それは、主にカトリック或いはプロテスタントいずれかの教会の経営する私立ギムナジウムの増大である。これもまた、近年急激に大衆化の進んだ公立ギムナジウムに対する批判を背景としている。現在では40万人以上、割合にして12%以上がこうした私立のギムナジウムに所属しており、これはもはや例外的現象ではなくなっている(Der Spiegel 23/1995: 72ff)⁽¹⁷⁾。またギムナジウムの大衆化が進みそのレベルが下がっているというこうした認識は、さらにアビトゥアの改革を求める声と結びついてくる。大学入学資格としてのアビトゥアを取得することは、かつては直ちにエリートへの道を意味するものであったが、現在ではそれは単なる「大衆証明書 Massenzeugnis」になってしまっている、こういった批判がとりわけ保守派の政治家から多く見られるようになってきた。数の増大は必然的に質の低下を招くという議論である。したがって、アビトゥアのレベルアップをはかり、その取得をより難しいものにするによって、それはかつてのようなエリート選抜機能を取り戻すことができるはずであると、そこでは主張されることになる。

⁽¹⁷⁾ただし、もちろんこの国においても社会階層の再生産という事態は生じている。以下のものを参照。Zinnecker [1992: 355-360] ツィネッカーはここで、両親の最終学歴と子供の学校選択との間に強い相関性があることを示している。親の学歴に比べれば、居住地(都市であるか田舎であるか)などの要因は相対的に影響力が弱い。ただしより厳密に考えるならば、問題にされねばならないのは、どういった社会階層の出身者が大学を卒業(アビトゥア取得、大学入学といったことではなく)しているのかということであろう。というのも、日本の場合などとは異なり、ドイツにおいては大学入学者の多くの部分が、卒業にいたる以前にドロップ・アウトしていくからである。HIS(高等教育情報センター)によれば、全体で約1/3の学生が中退している(Stern, 16/1993: 172)。極端な例としては、ノルトライン・ウェストファーレン州の諸大学において、ゲルマニスティックや政治学を先行する学生たちの80%以上が大学を中退しているというデータがある(Spiegel Spezial, 3/1993: 24)。

⁽¹⁸⁾Der Spiegel 24/1995: 210ff エリートについて論じることが反動的と見られる傾向に変化はないものの、徐々に革新勢力の間からも政治的・経済的指導者としてのエリートが現在の停滞状況を切り抜けるためには必要であるといった議論が見られるようになってきている。SPDのP・グロツなどがその代表的論者である。

⁽¹⁹⁾EBSは、学生数が780とごく小規模で、授業料は1ゼメスターあたり8000マルク(年間約100万円ほど)である。これは基本的に学費というものの存在しないドイツにおいては破格の金額である。

⁽²⁰⁾70年代初頭には28万人であったものが、90年代初頭にすでに42万人を越えている。しかもこうした私立ギムナジウムの多くで定員数を超える応募者が殺到するという事態が生じており、例えばヒルデスハイムにあるカトリック系のヨゼフィヌム・ギムナジウムでは応募者の60%を落としていることが報じられている。

このアビトゥアのレベルが落ちているという主張は、大学生の「教養」がかつてに比べて著しく減退しているという認識をひとつの根拠としている。「シュピーゲル」の行った、ドイツ人の一般教養に関するアンケート調査は、そうした認識をほぼ裏付けることとなった。その中から、いくつかの興味深い例を挙げてみたい⁽²¹⁾。

<文学>

- ・「ゲーテの作品を思いつく限り挙げよ」、という質問に対する回答。

「ひとつも知らない」……34% 「ひとつだけ（大半が『ファウスト』）」……33%

- ・「次の文学作品の作者を挙げよ」という質問に対する正解者。

『臣下 Der Untertan』（ハインリヒ・マン）……19%

『道化の意見 Ansichten eines Clowns』（ハインリヒ・ベル）……26%⁽²²⁾

<音楽>

- ・「次の曲の作曲者は誰か」という質問に対する正解者。

「未完成」（シューベルト）……10% 「エロイカ」（ベートーベン）……21%

<宗教>

- ・「次の事項について説明せよ」という質問に対する正解者。

「山上の垂訓 Bergpredigt」……27%

<歴史>

- ・「次の事項について説明せよ」という質問に対する正解者。

「カノッサの屈辱」……22% 「あいくち伝説 Dolchstoßlegende」……17%⁽²³⁾

上記のような、いわば伝統的な事象に関する教養の減退が直ちに非難されるべきであるかどうかについては、もちろん簡単に結論を下すことはできない。実際この点が、教育行

⁽²¹⁾Der Spiegel, 51/1994 シュピーゲル誌のこの調査は、1994年の10月から11月にかけて、男女それぞれ1000人ずつ合計2000人を対象にして行われた。文学、歴史、音楽など、16の領域に関して、総数約100項目の質問がなされた。被調査対象となったのは14歳以上の全年齢層であり、その意味で特に青年層を対象とした調査ではないが、(Der Spiegel, 23/1995:82)で述べられているように、ここで得られた結果は、ほぼ同様のかたちで青年層にも当てはまる。

⁽²²⁾H・マン、H・ベルのこれらの小説は、いずれも近代ドイツ小説を代表するものである。なお同様の質問に対して、「ブリキの太鼓 Die Blechtrommel」（ギュンター・グラス）では46%、「ブッデンブローク家の人々 Die Buddenbrooks」（トーマス・マン）では42%となっている。

⁽²³⁾第一次大戦でのドイツの敗北は、国内の左翼革命分子の裏切りによるものだとするこの「あいくち伝説」（ヒトラーやヒンデンブルクによりさかんに取り上げられた）は、近代史上のいわば常識であるが、非常に低い値を取っている。これに対し、例えば「水晶の夜 Reichskristallnacht」（1938年11月9日のナチによるユダヤ人虐殺）は78%と高い値を示している。

政に携わる政治家たちにより成されている、昨今の教養をめぐる議論のひとつの中心となっている。つまりCDU、CSUなどの保守系の政治家たちが、若年層の教養の低下を嘆かわしいこととして論じ、いわば過去へ回帰するような改革を訴えるのに対し、SPDなどの革新系の政治家たちは、それはあくまで教養の質が変わっただけであって、取り立てて嘆くべきことではないとする。つまり現代の若者は、確かにクラシック音楽や純文学に関する教養は失ってしまったが、例えばコンピュータやエコロジー問題に関する知識は彼らの親の世代に比べてはるかに増大しているのであり、それはあくまで時代の変化に伴う「教養」の質の変容にすぎないとするのである。

ただし全体として見れば、今日の教育行政の場においては、前者のようないわば保守的な意見が多数派を占めている。そしてこうした見解は、必然的に先に挙げたようなアビトゥア改革を志向するものとなるのである。こうした立場の基礎にあるのは、ギムナジウムというのは本来幅広い教養を身につけるべきところだという考え方である。ドイツの大学では入学試験というものが行われないため、当然いわゆる受験勉強も存在しない。従って上記のことは、制度的にも裏付けられていると言える。ギムナジウムは、受験勉強のための詰めこみ教育をするところではなく、教養獲得の場という位置づけがなされているのであり、アビトゥアはその修了試験なのである。

これに対しドイツにおいては、大学はもっぱら専門教育の場として位置づけられている。一般教養課程というものは存在せず、新入生はすぐに自らの選択した学科の専門教育を受けることになる。とはいえ、そこでも勿論教養ということが全く省みられていないわけではない。学生は通常次の二つのパターンのいずれか、則ち主専攻1+副専攻2或いは主専攻2という学科の選択をするのであるが、これもある意味では幅広い知識と視野を学生に身につけさせるという含みを持った制度であるとも捉えられる。実際、自らの専攻をすべて関連領域に固めるものもいる一方、例えば政治学と生物学、経済学と化学といった学科選択も多く見られる。こうしたドイツの大学制度の内に、我々は教養主義的要素とテクノクラシー的要素との葛藤を見ることができるであろう。高度に専門分化した近代産業社会を支えるテクノクラートを養成するためだけならば、むしろすべての学生がひとつの主専攻を学ぶようなシステムを作るべきである。しかしながら実際は上記のような方策が採られ、大学は同時に単なるテクノクラートではない「教養人」をつくる機能をも残存させている。ここに大学制度のドイツ的特性を見ることができる。

大学が上記のような性質を持ちながらも、基本的には専門教育の場として位置づけられているのに対し、ギムナジウムはその前段階として、幅広い教養を身につけるための場であると考えられる。もちろん歴史的に見れば、アビトゥアというものも、それが導入され

た当時には、「知の資格化によって、教養のもつ人格的陶冶の意味を風化してしまう」(上山 [1986: 38]) ものとして批判されていた。それ以前は、ギムナジウムを卒業したものは無試験で大学に進学することができたからである。しかし少なくとも現在においては、それは専門教育に入る以前の一般教養課程の修了証明という位置づけをもつべきはずのものである。こうした状況はしかしながら、先に挙げた N. C. というものが拡大していくにつれ、変わりつつある。つまり、入学制限を行う学科が増大するにつれ、アビトゥアは徐々に「点数かせぎの場」になってきているのである。実際、最近のギムナジウムの学生は、いかに要領よく点数を取るかというテクニックを身につけることだけに熱心であるといった批判がしばしば成されている(Der Spiegel, 23/1995)。N. C. の拡大は、いわばアビトゥアの中に受験勉強的要素を混入させたのである。こうした傾向が進めば、ギムナジウムの教養形成の場としての機能は薄まっていかなざるを得ないであろう。このことは、N. C. というものがひとつにはエリート選抜の機能を持つものとして存在しているということを考え合わせるならば、少々アイロニカルな感じを与える。というのも、高等教育の現状に関する二つの主張、則ち社会の指導者たるエリートを育成すべきであるという主張と、低下した若者の教養レベルを上げるべきであるという主張とは、上で述べたことから明らかなように、現実の局面では排他的に作用し合っているように見えるからである。

6 おわりに

上述したようなドイツの高等教育に関する一種の矛盾は、とりわけ90年代に入ってから顕著になってきたものであるが、これは60年代後半から70年代にかけての教育制度改革にその根をもっていると考えられる。この時期特に進歩的勢力を中心に、教育における機会均等の理念を実現するため、政策的に高等教育の大衆化が図られた。一方で試験科目の選択における自由を拡大するなどしてアビトゥアの取得を容易にし、ギムナジウム卒業生を増大させ、また他方ではその受け皿として、各種専門学校を大学に昇格させるなどして大学の数を増やしたのである。その結果、この時期ドイツでも大学生数の増加が見られた。但しそれは同時期の日本やアメリカの増加率に比べれば規模の小さいものであったのであり、本格的な高等教育の大衆化は、先に述べたように80年代半ばに訪れることになる。その時期から現在に至るまでの大学生数の急増は、勿論経済的要因にも左右されているであろうが、ひとつにはこの改革の結果が時差を伴って(大学進学がギムナジウムへの入学を事実上前提としているため)表れてきたことに起因していると言えるであろう。

こうした改革は、伝統的な教養主義の理念を放棄し、高等教育の大衆化を達成すること

によりいわば平等主義を貫徹させようとしたのであるが、それは同時に広い階層の間に競争原理を導入し、教育に関するアスピレーションを加熱させることにもなった。ここに当時の改革の矛盾点があったと言える⁽²⁴⁾。このような内部に矛盾をはらんだ改革の不徹底が、現在の教育制度に対する批判の根本にあると考えられるのである。前章で述べたような、それ自体再び矛盾を含んだ現在の新たな教育改革への動きが今後どのような発展を見せるかについては、勿論ここでは明言できない。しかしながらこのドイツの事例が、大衆社会における教養理念の運命に関して重要な視点を与えるものであるということは確かであろう。

文献

- Giese, E. und H. Bathelt, 1994, „Anmerkungen zum Hochschulranking als Instrument zur Belebung des Wettbewerbs im deutschen Hochschulsystem“ in *Die Universität- Idee und Wirklichkeit, Heidelberger Verlagsanstalt*
- 西尾幹二、1982、『日本の教育 ドイツの教育』新潮社
- F・K・リンガー、1991、『読書人の没落』西村稔訳、名古屋大学出版会
- 竹内洋、1995、『日本のメリトクラシー』東京大学出版会
- 田中紀行、1990、「近代化過程における学歴エリートの比較分析——ドイツと日本を事例として——」、筒井清忠編『「近代日本」の歴史社会学』木鐸社
- 筒井清忠、1995、『日本型「教養」の運命』岩波書店
- 上山安敏、1986、『世紀末ドイツの若者』三省堂
- 潮木守一、1992、『ドイツの大学』講談社
- Windolf, Paul, 1994 „Strukturwandel der Universitäten im internationalen Vergleich: Deutschland, USA, Japan“ in *Die Universität- Idee und Wirklichkeit*
- Zinnecker, Jürgen, 1987, *Jugendkultur 1940- 1985*, Leske+ Budrich, Opladen,
- Zinnecker, Jürgen(Hg.), 1992, *Jugend '92 Band 2 Im Spiegel der Wissenschaften*, Leske+Budrich, Opladen

雑誌

- Focus, 39/1993, »Die besten deutschen Hochschulen«
- Focus, 13/1994, »Lohnt sich das Studium noch?«
- Spiegel Spezial, 1/1990, Welche Uni ist die Beste?
- Spiegel Spezial, 3/1993, Welche Uni ist die Beste?
- Der Spiegel, 6/1994, »Soziologe Otto Hondrich über den Wandel der Unis und den Studenten Neuen Typs«
- Der Spiegel, 38/1994, »Jugendumfrage '94- Selbstporträt der jungen Deutschen«
- Der Spiegel, 51/1994, »Spiegel- Umfrage „Was wissen die Deutschen?“«
- Der Spiegel, 23/1995, »Wie Bildungspolitiker das Abitur retten wollen«

⁽²⁴⁾ こうした点に関しては、以下のものを参照。西尾 [1982]

Der Spiegel, 24/1995, »Das Comeback der Elite«

Stern, 16/1993, »Wie gut sind unsere Universitäten?«

Stern, 26/1994, »Neue Serie Uni '94: Wo studieren Spaß macht- Fünf Jahre nach der Wende sind die Hochschulen in den neuen Bundesländer ein Geheimtip«

付記：表の数値について

表1,2：ここで挙げられているパーセンテージは、アンケート項目の全てに最高の評価が成された場合に100%、全てに最低の評価が成された場合に0%となるように計算されている。1990年の調査に比べて、1993年のそれでは数値の上下への分散の度合いが激しくなっていることが見て取れる。

表3：FLは、Forschungsleistung（研究業績）を意味する。1992年度に各学科で発表された学術研究の数を総合し（学科ごとのランキングもまた掲載されている）、全体としてのランキングが作成された。数値は大学間での研究業績数の相対的關係を表す。

表4,5：本文中では言及しなかったが、参考までにシュピーゲルの1993年の調査の中から、社会科学のランキングを載せておいた。表4が学生による評価、表5が教官による評価である。前者では学生へのアンケートをもとに、最高の評価が1、最低の評価が6として数値が出されている。また表5の教官へのアンケートにおいては、自分がよいと思う大学とよくないと思う大学とが聞かれているため、マイナスを示す大学も存在する。「よいと思う」に+1、「よくないと思う」に-1が与えられ、表には、それらの数を総合した絶対値が挙げられている。

（ぬまじり まさゆき・日本学術振興会特別研究員）

表1 Spiegel 1990		
	Universität	Prozent
1	Uni- GHS Siegen	67.9
2	TU Clausthal	63.9
3	Uni- GHS Paderborn	62.6
4	Uni Würzburg	60.7
5	Uni Bielefeld	59.3
6	Uni Bayreuth	58.3
6	Uni Konstanz	58.3
8	Uni Augsburg	56.3
9	Uni- GHS Wuppertal	56.1
9	Uni Saarbrücken	56.1
9	Uni Düsseldorf	56.1
12	Uni Bamberg	55.5
13	Uni Dortmund	55.2
14	Uni Regensburg	54.6
15	Uni Osnabrück	54.3
16	Uni Mannheim	54.2
17	Uni Köln	54.1
17	Uni Kaiserslautern	54.1
17	Uni Bremen	54.1
20	Uni Oldenburg	54.0
21	Uni- GHS Duisburg	53.8
22	TU Darmstadt	53.6
23	Uni Gießen	53.0
24	Uni Tübingen	52.4
24	Uni Kiel	52.4
26	Uni- GHS Kassel	51.9
27	Uni Trier	51.5
28	RWTH Aachen	51.3
29	Uni- GHS Essen	51.2
30	Uni Marburg	51.0
31	Uni MH Hannover	50.8
32	Uni Mainz	50.7
33	Uni Göttingen	50.5
34	Uni Karlsruhe	50.3
35	Uni Hohenheim	50.2
35	Uni Ulm	50.2
37	Uni Heidelberg	50.1
38	Uni Passau	49.6
39	Uni Erlangen- Nürnberg	49.5
40	Uni Frankfurt	47.7
41	Uni Münster	47.2
42	Uni Bonn	47.1
43	FU Berlin	46.7
44	Uni München	45.8
45	TU Berlin	45.5
46	Uni Bochum	45.0
47	Uni Stuttgart	44.7
48	TU München	44.0
49	Uni Freiburg	43.6
50	Uni/TU Hamburg	43.4
51	TU Braunschweig	43.2

Spiegel Spezial 1/1990, S. 12f

表2 Spiegel 1993		
	Universität	Prozent
1	Uni Düsseldorf	95.5
2	UGH Duisburg	90.9
3	Uni Konstanz	85.0
4	UGH Siegen	83.3
5	Uni Bielefeld	81.8
6	Uni Passau	78.6
6	Uni Trier	78.6
8	Uni Mannheim	75.0
9	Uni Regensburg	72.7
10	Uni Bayreuth	71.4
11	FU Berlin	66.7
12	Uni Kaiserslautern	64.3
13	Uni Bamberg	58.3
14	Uni Ulm	57.1
15	Uni Freiburg	54.5
16	Uni Kiel	54.2
16	Uni Mainz	54.2
18	Uni Saarbrücken	53.6
19	TH Aachen	50.0
19	TU Braunschweig	50.0
19	Uni Dortmund	50.0
19	TU München	50.0
19	Uni Oldenburg	50.0
19	UGH Wuppertal	50.0
25	TH Darmstadt	45.5
25	Uni Heidelberg	45.5
25	UGH Paderborn	45.5
28	Uni Osnabrück	43.8
29	Uni Erlangen-Nürnberg	42.3
29	Uni Würzburg	42.3
31	Uni Göttingen	41.7
31	Uni Marburg	41.7
31	Uni Stuttgart	41.7
34	UGH Essen	40.9
35	Uni Tübingen	38.5
36	Uni Bremen	37.5
36	Uni Köln	37.5
3639	Uni München	37.5
39	Uni Gießen	36.4
40	Uni Frankfurt	34.6
41	UGH Kassel	33.3
42	Uni Bochum	32.1
43	TU Berlin	31.8
44	Uni Karlsruhe	31.3
45	Uni Augsburg	27.8
46	Uni Hamburg	26.9
46	Uni Hannover	26.9
48	Uni Münster	16.7
49	Uni Bonn	15.4

Spiegel Spezial 3/1993, S. 16

表 3 Focus 1993		
	Universität	FL
1	Berlin FU	3.6
2	München LMU	3.5
3	Bonn	2.8
4	Karlsruhe, Hamburg, Bochum, Hamburg TH, Lübeck	2.7
5	Tübingen	2.6
6	Münster, Heidelberg, Göttingen, Erlangen- Nürnberg, Köln	2.5
7	München TU	2.4
8	Aachen, Frankfurt/M., Kaiserslautern	2.3
9	Marburg	2.2
10	Mainz, Freiburg, Darmstadt, Berlin TH	2.1
11	Konstanz, Berlin HU	2.0
12	Bielefeld, Hannover, Würzburg, Stuttgart	1.9
13	Kiel	1.8
14	Bremen, Ulm, Essen, Düsseldorf	1.7
15	Gießen	1.6
16	Regensburg, Dortmund, Kassel, Homburg- Saarland, Mannheim, Leipzig	1.5
17	Braunschweig	1.4
18	Paderborn	1.3
19	Freiburg, Oldenburg, Jena	1.2
20	Bayreuth, Clausthal, Duisburg, Osnabrück, Wuppertal, Magdeburg, Halle/Wittenberg	1.1
21	Greifswald, Augsburg, Hohenheim	1.0
22	Siegen	0.9
23	Witten/Herdecke, Dresden	0.8
24	Erfurt	0.7
25	Rostock	0.6
26	Potsdam	0.4
Focus 39/1993, S. 131		

表4 Soziologie (Studenten)		
	Universität	Note
1	Uni Bielefeld	2.50
2	Uni Düsseldorf	2.60
3	Uni Heidelberg	2.84
4	TU Aachen	2.87
5	Uni Trier	2.89
6	Uni Freiburg	2.93
7	UGH Siegen	2.96
8	Uni Bamberg	2.97
9	FU Berlin	3.00
10	Uni Regensburg	3.00
11	Uni Mannheim	3.01
12	Uni Würzburg	3.04
13	Uni Osnabrück	3.05
14	Uni Mainz	3.07
15	TH Darmstadt	3.14
16	Uni Saarbrücken	3.16
17	Uni Marburg	3.22
18	Uni Hannover	3.26
19	Uni Kiel	3.27
19	Uni München	3.27
21	Uni Tübingen	3.38
22	UGH Kassel	3.41
23	Uni Köln	3.54
24	Uni Frankfurt	3.58
25	Uni Hamburg	3.62
26	Uni Bonn	3.68
27	Uni Münster	4.00
Spiegel Spezial 3/1993, S. 58		

表5 Soziologie (Professoren)		
	Universität	Ergebnis
1	Uni Bielefeld	43
2	Uni Mannheim	19
3	Uni Köln	18
4	Uni München	9
5	Uni Erlangen-Nürnberg	9
6	Uni Heidelberg	8
7	Uni Konstanz	8
8	Uni Göttingen	6
9	Uni Bamberg	5
10	Uni Freiburg	5
11	Uni Tübingen	3
12	Uni Würzburg	3
13	Uni Trier	3
14	Uni Marburg	2
15	Uni Bayreuth	2
16	Uni Münster	1
17	Uni Hannover	1
18	Uni Mainz	1
19	Uni Hamburg	-2
20	Uni Frankfurt	-2
21	UGH Kassel	-4
22	Uni Osnabrück	-5
23	FU Berlin	-20
24	Uni Bremen	-21
Spiegel Spezial 3/1993, S. 58		

Die Situation der Hochschulausbildung in der heutigen Bundesrepublik Deutschland: Universität und Bildung in der Massengesellschaft

Masayuki NUMAJIRI

In diesem Aufsatz möchte ich auf die Probleme eingehen, die das heutige deutsche Hochschulsystem enthält, indem ich die aktuelle Situation der Universitäten und Gymnasien betrachte. Konkret möchte ich zunächst einige institutionelle Eigentümlichkeiten des deutschen Bildungssystems, besonders im Hinblick auf die höhere Bildung, herausstellen. Hierzu soll eine vergleichende Betrachtung zwischen einigen Ländern angestellt werden. Im Vergleich zu z. B. Japan oder den USA, kann man sagen, daß die Bildungsexpansion in Deutschland relativ spät (seit ca. 1985) begonnen hat.

Zweitens will ich versuchen, zu erklären, wie das Hochschulsystem in Deutschland die Funktion der Elitenbildung erfüllt. Diese Frage ist nicht einfach zu antworten, denn es gibt in Deutschland offiziell keine Uni-Hierarchie wie in Japan, b.z.w. keine Eliteanstalten wie grandes écoles in Frankreich. Es gibt zwar seit 1990 mehrere Versuche einer Uni-Rangliste meistens in den Zeitschriften, die ich auch hier erwähne, doch scheint sich in ihnen ironischerweise gerade zu zeigen, daß keine feste Rangordnung zwischen den Hochschulen existiert. Stattdessen spielt der N. C. eine große Rolle in Deutschland.

Drittens möchte ich auf das Problem der Bildung im allgemeinen eingehen. Heutzutage klagen öfters Bildungspolitiker oder auch Intellektuelle über den Niedergang der Bildung der jungen Generation. Ob diese Klage jedoch berechtigt ist, muß erst noch geklärt werden. In diesem Zusammenhang muß über die Bedeutung und Definition von „Bildung“ nachgedacht werden. Ein Bedeutungswandel dieses Begriffes über die Generationen hinweg wäre zu berücksichtigen. Auch möchte ich die aktuelle Situation des Abiturs in die Diskussion mit einbeziehen.

Abschließend soll noch von dem Widerspruch die Rede sein, in den die derzeitige Diskussion über die Bildungsreform geraten ist. Dieses noch von den 60er Jahre herrührende Problem in Deutschland bedarf jetzt dringend einer Lösung.